

学習成果の自己評価（保育学科）

保育学科では、学習成果を軸とした教育・評価システムを整備し、豊かな感性と人間性を備えた質の高い保育者養成について少人数教育を通して実施している。学科はステークホルダーが学習成果を認識できるよう、平成30年度に良質なシラバスの作成に取り組み、学習成果の可視化を目指した。令和元年度から運用を開始した新たなシラバスでは、専門的学習成果と汎用的学習成果を記載することにより成績評価基準が明確になり、教員及び学生が学習成果の獲得状況を評価、把握できるようになった。加えて一部実習科目におけるルーブリックの実施によって学生が評価基準を理解し、学習成果の獲得状況を自己評価できる体制を整えた。また、学習成果の査定を通して実効性を検証する体制が整えられ、学則には、「単位授与」「卒業要件」「評価基準」「資格取得」について明示され、学生は身につけるべき学力、スキル、能力・資質、資格と評価基準を理解し養成課程に取り組むことができる。

また、学生に対するフィードバックとして、学習成果の獲得について前期・後期の終了後に、「学習成果の自己評価」や GPA、実習評価等に基づき教員との面談を実施している。令和元年度より2年間の「学習成果の自己評価」をグラフ化し一人一人に配布することで、より学習成果の獲得が把握できるようにしている。こうしたフィードバックの仕組みにより、学生は必要とされる学習成果の獲得に向けてさらに理解を深め課題を明確にすることができている。教員は学科の学習成果をもとに専門職として習得されることが期待されている具体的な知識・技能・態度を学科会議で共有し、その獲得が可能となるように学科会議と保育学科教職課程委員会を通して、計画的にカリキュラムを編成する作業を実施している。教員はその目標に向けて、担当する科目において学生に対してシラバスに示した成績評価基準により学習成果の獲得状況を評価することを明確に示し、測定可能な評価を通して学習成果の獲得状況を把握している。改訂されたシラバスの運用が定着し、専任教員及び非常勤教員が共通理解のもと、学習成果の重要性を意識している。

保育学科では「学習成果の自己評価」を平成23年度から改善を重ねて実施してきた。令和6年度卒業生は、実習を経験する前のⅠ期：1年生の8月、Ⅱ期：1年生の2月、Ⅲ期：本実習を全て終えた2年生の9月（幼稚園・保育所実習Ⅰ・保育所実習Ⅱ・施設実習が概ね終了後）、Ⅳ期：就職活動を経験し保育実践研究を作成し終えた2月に、「学習成果の自己評価」を実施した。保育者に必要な資質能力についての自己評価で、＜人間性＞＜他者との協力＞＜コミュニケーション＞＜幼児教育についての理解＞＜保育についての理解＞＜子どもについての理解＞＜基礎知識・技能＞＜保育実践＞＜課題探求＞の9領域について4段階で評価している。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 4：十分に理解(習得)できた | 3：おおむね理解(習得)できた |
| 2：理解(習得)に努力を要する | 1：一層努力を要する |

教育課程半期終了ごと自分自身の状況进行评估し、到達度を省察した結果は下記のとおりである。

次の表には令和5年度入学生における「学習成果の自己評価」のⅠ期とⅣ期の結果の比較を示した。Ⅰ期とⅣ期の平均評定値の比較では、＜保育についての理解＞＜子どもについての理解＞＜保育実践＞の3領域において有意な差（上昇）が見られた項目があり、特に＜保育実践＞における「保育構想力」「教材開発力」「保育展開力」が比較的大きく上昇していることが示された。Ⅰ期と比較してⅣ期の平均得点が低い項目も見られた（＜他者との協力＞の領域における「役割遂行力」「他者との連携・協力」、＜コミュニケーション＞における「子どもに対する態度」、＜課題研究＞における「教育・保育時事問題」）が、いずれの項目も、統計的に有意な差ではなかった。

表Ⅰ期（1年次8月）とⅣ期（2年次2月）の比較

領域	項目	Ⅰ期 (1年次8月)		Ⅳ期 (2年次2月)		Ⅳ－Ⅰ	t
		M	SD	M	SD		
人間性	自分の性格に関する自己理解	3.17	0.67	3.32	0.54	0.15	-1.41
	自分の行動特徴に関する自己理解	3.10	0.60	3.27	0.61	0.17	-1.66 †
	向上心	3.12	0.76	3.24	0.68	0.11	-0.91
他者との協力	表現力	3.07	0.74	3.24	0.68	0.17	-1.36
	他者意見の受容	3.33	0.55	3.34	0.63	0.01	-0.06
	保護者・地域との連携協力	3.31	0.70	3.41	0.59	0.10	-0.87
	共同保育の実践実施	3.14	0.65	3.29	0.62	0.15	-1.40
	他者との連携・協力	3.52	0.55	3.49	0.57	-0.03	0.28
	役割遂行	3.40	0.65	3.31	0.68	-0.09	0.80
コミュニケーション	発達段階に対応したコミュニケーション	3.17	0.63	3.17	0.59	0.00	0.03
	子どもに対する態度	3.47	0.59	3.46	0.54	-0.01	0.12
	公平・受容的態度	3.30	0.60	3.34	0.58	0.04	-0.42
	社会人としての基本	3.28	0.64	3.29	0.62	0.00	-0.04
幼児教育についての理解	教職の意義	3.21	0.56	3.27	0.55	0.06	-0.64
	教育の理念・教育史・思想の理解	2.96	0.64	3.07	0.64	0.10	-0.96
	学校教育の社会的・制度的・経営的理解	2.94	0.62	3.08	0.65	0.15	-1.35
保育についての理解	保育の意義	3.15	0.67	3.29	0.64	0.14	-1.24
	保育の理念・保育史・思想の理解	2.84	0.70	3.07	0.61	0.23	-2.01 *
	保育の社会的・制度的・経営的理解	2.84	0.68	2.97	0.61	0.13	-1.13
子どもについての理解	心理・発達論的な乳幼児の理解	3.04	0.64	3.25	0.58	0.22	-2.07 *
	クラス集団の形成	3.05	0.65	3.27	0.58	0.22	-2.08 *
	子どもの状況に応じた対応	3.10	0.75	3.14	0.63	0.04	-0.31
教科・教育課程に関する基礎知識・技能	保育内容5領域	3.17	0.67	3.22	0.56	0.05	-0.44
	幼稚園教育要領・保育所保育指針	2.98	0.63	3.10	0.61	0.13	-1.19
	教育課程・保育課程の構成に関する基礎理論・知識	2.90	0.68	3.08	0.62	0.18	-1.63
	情報機器の活用	2.94	0.68	3.02	0.60	0.08	-0.71
	保育の指導法	2.89	0.67	3.08	0.57	0.20	-1.82 †
保育実践	保育構想力	2.65	0.79	3.17	0.62	0.52	-4.31 ***
	教材開発力	2.75	0.72	3.08	0.62	0.33	-2.85 **
	保育展開力	2.96	0.73	3.24	0.63	0.27	-2.33 *
	表現技術	2.94	0.70	3.14	0.60	0.20	-1.75 †
課題研究	課題認識と探究心	3.09	0.60	3.29	0.62	0.20	-1.95 †
	教育・保育時事問題	3.15	0.73	3.05	0.68	-0.10	0.80

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

これらのことから、学生の自己評価として、2年間の学習を通して一定程度以上の成果を獲得していることが示されたと言える。昨年度の卒業生（令和4年度入学生）と比較すると、有意な上昇を示した項目数や上昇幅は低い結果となったが、これは、昨年度の卒業生は、入学時にはまだ様々な“新型コロナウイルス感染症の流行による制限”が残る中、特にⅠ期の自己評価の平均値が低い傾向にあり（平均値2.76）、その後、2年次の5月より新型コロナウイルス感染症の第5類移行とともに、実習や行事等も概ね“コロナ禍”前と同等の実施をすることができた（Ⅲ期、Ⅳ期は、様々な学びの機会とともに、自己評価が上昇しやすい状況にあった）ことが影響していると考えられる。実際に、令和5年度入学生のⅠ期における全領域の平均評定値は3.09であり、令和4年度入学生（2.76）と比較して高い値となり、一

方で、Ⅳ期の全領域の平均評定値は 3.21 と、令和 4 年度入学生 (3.11)、令和 3 年度入学生 (3.14) と比較して同程度または若干高い値であった。このことから、前年度の学生よりも、“上昇幅”は小さくなったものの、最終的な学習成果の自己評価としては、例年同様、高い水準を達成できたと言えるだろう。

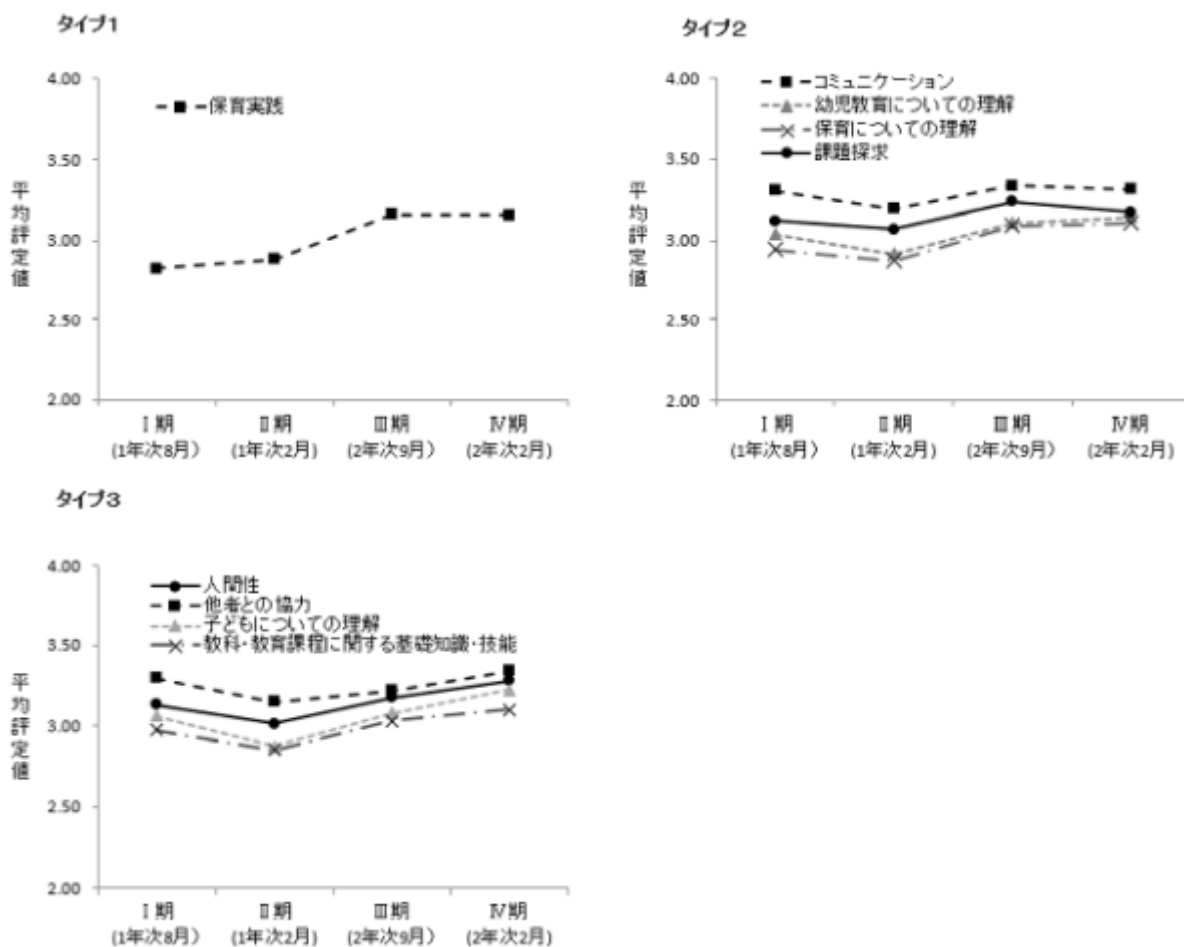
また、近年の、本学の「入学者の変化」の影響も昨年度に引き続き、数値に表れている。18 歳人口の減少および近年、保育の分野を希望する高校生も減少傾向にある中で、本学の令和 5 年度入学生も定員を大きく下回ることとなり、その結果、入学希望者が定員を超えていた時期と比較すると、意欲・学力面をはじめ多様な学生が入学した年であったと考えられる（実際に、実習や単位取得が困難であった学生や、資格取得・進路選択も様々な配慮や支援が必要な学生が多い学年でもあった）。その傾向は、今回の「学習成果の自己評価」における各項目の標準偏差の変化にも表れている。令和 3 年度入学生までは、各項目における標準偏差はおおむね 0.4～0.6 であったが、今年度（令和 5 年度入学生）の各項目における標準偏差は、昨年度（令和 4 年度入学生）に引き続き、0.6～0.8 と、ばらつきが一昨年度までの学生よりも大きい結果となった。短期大学や本学を取り巻く様々な変化の影響は受けながらも、また、個別のニーズによりきめ細やかに対応していく必要性が示されながらも、令和 5 年度入学生については、Ⅳ期の全ての領域およびほぼすべての項目について自己評価が 3.0「おおむね理解(習得)できた」を超えていることから、各々の状況に応じた学習成果の獲得が、2 年の間で一定の水準まで行われたと言えるだろう。

I 期からⅣ期の変化の詳細について、次の表には各期における平均評定値を示した。I 期からⅣ期の平均評定値は概ね上昇していく傾向は同じであるが、推移の傾向は大きく 3 つのタイプに分類された。3 つのタイプそれぞれにおける 4 時点の平均評定値の変化過程はタイプにより異なっており、それぞれの時期の継時的変化の特徴ごとにタイプとして、図にまとめた。

表平均評定値の時期変化

		I 期	II 期	III 期	IV 期	タイプ
		1年次 8月	1年次 2月	2年次 9月	2年次 2月	
人間性	M	3.13	3.01	3.17	3.28	3
	SD	0.56	0.61	0.61	0.53	
他者との協力	M	3.29	3.15	3.22	3.34	3
	SD	0.45	0.56	0.56	0.51	
コミュニケーション	M	3.31	3.19	3.34	3.31	2
	SD	0.47	0.56	0.51	0.46	
幼児教育についての理解	M	3.04	2.91	3.11	3.14	2
	SD	0.53	0.64	0.56	0.54	
保育についての理解	M	2.94	2.87	3.09	3.11	2
	SD	0.60	0.62	0.61	0.56	
子どもについての理解	M	3.06	2.87	3.08	3.22	3
	SD	0.59	0.63	0.55	0.53	
教科・教育課程に関する基礎知識・技能	M	2.98	2.85	3.03	3.10	3
	SD	0.58	0.66	0.59	0.53	
保育実践	M	2.83	2.88	3.16	3.16	1
	SD	0.64	0.62	0.55	0.51	
課題研究	M	3.12	3.07	3.24	3.17	2
	SD	0.58	0.64	0.65	0.58	

図学習成果の自己評価の特徴的な変化



それぞれの特徴として、平均評定値の4時点の変化が、前半（特にⅡ期からⅢ期）に増加する領域（タイプ1）、Ⅰ期からⅡ期にかけて若干の減少を示した後に、Ⅱ期からⅢ期後半にかけて増加する領域（タイプ2）、Ⅰ期からⅡ期にかけてⅣ期を通して比較的平坦または若干の増加があり、Ⅰ期からⅡ期にかけて一度減少した後Ⅱ期からⅣ期にかけて増加する領域（タイプ3）に分かれた。

タイプ1は＜保育実践＞の領域であった。実践に関しては、1年次の9月の観察実習、2月の部分実習、2年次5月の予備実習、その後の本実習と、1年次後半から2年次前半にかけて実習を通して学ぶ機会が多いこともあり、Ⅰ期からⅡ期、特にⅡ期からⅢ期にかけて増加しているのは例年と同じ傾向である。一方で、Ⅰ期からⅡ期、Ⅲ期からⅣ期にかけての増加が例年と比較すると小さくなっており、Ⅲ期とⅣ期は同じ値であった。Ⅳ期は、学内での、チャイルドアイランドや聖和幼稚園との交流会など、様々な実践の機会があるが、この時期の学生の自己評価における変化が見られなかったことは、行事の内容や進め方・指導の仕方を見直す必要があることを示唆しているかもしれない。たとえば、今年度、聖和幼稚園との交流会では、園児数の減少から、学生一人当たりの園児数が昨年度と比較して大幅に少なくなってしまったという事実がある。実践は、子どもとの関わりを基盤として成り立つものであるため、次年度以降、聖和幼稚園だけでなく、地域の幼稚園との交流の機会を設けたり、また、チャイルドアイランドの実施方法・内容についても検討をしていく必要があるだろう。

タイプ2は＜コミュニケーション＞＜幼児教育についての理解＞＜保育についての理解＞＜課題探求＞であった。＜コミュニケーション＞については、コミュニケーションの質的な変化の捉え方も含めて変化をしている可能性が考えられる。Ⅱ期は、幼稚園での観察実習・部分実習、保育所や発達支援センターでの観察実習、また、チャイルドアイランドや交流会など、様々な実習や行事の中で、子どもや職員と接する機会が多くなる時期である。Ⅰ期で、短大に入学し、友人や教職員との「一般的な」コミュニケーションを取ってきた中で、Ⅱ期において、「保育現場・保育実践」におけるコミュニケーションを経験し、「コミュニケーション」の捉え方が変わった結果、自己評価が下がった可能性がある。その後、2年次の実習を経て、保育者としてのコミュニケーションの実践を積み重ねた結果、Ⅱ期からⅢ期にかけては自己評価が上がったと考えられる。また、＜幼児教育についての理解＞＜保育についての理解＞に関しては、Ⅰ期の、授業を中心とした「基礎的知識の理解」と、Ⅱ期以降の様々な「実践の場を通じた理解」の間で、自己評価が若干下がる時期（Ⅰ期からⅡ期）はあるものの、Ⅱ期からⅣ期にかけては、知識と実践を合わせた理解として、特にⅡ期からⅢ期にかけて上昇したと考えられる。＜課題探求＞についても、保育・幼児教育についての知識・理解の深まりとともに探求すべき課題についての認識や選択も広がり深まった結果、「知らなかったことを知る」機会も含めて、同様の結果となったと言えるだろう。

タイプ3は＜人間性＞＜他者との協力＞＜子どもについての理解＞＜教科・教育課程に関する基礎的知識・技能＞であった。＜子どもについての理解＞＜教科・教育課程に関する基礎的知識・技能＞については、タイプ2で述べた、Ⅰ期の授業を中心とした基礎的知識の習得から、Ⅱ期の実習・行事を通じた実践的な技術の習得の、学びの質的な変化の中で、一時的に自己評価は下がるものの、Ⅱ期以降、「理解」の深まりも合わせて、知識・技術が統合された結果としてⅣ期までの上昇が示されたと考えられる。＜人間性＞について、Ⅰ期からⅡ期にかけての減少は、本学入学後の様々な経験や学びの中で、改めて自分と深く向き合う

機会が増えたことにより、一時的に評定値が下がった可能性が考えられる。また、＜他者との協力＞については“コロナ禍”の影響も考えられる。令和5年度入学生は、高校3年間で、様々な“制限”とともに過ごしてきた学年であり、高校の在学時から協働の機会が極端に少なかった学年である。入学後、徐々に“制限”が緩和され、授業におけるグループワークや行事を経験しながら、Ⅰ期では、協力することの楽しさを感じた一方で、Ⅱ期では学年をまたいだゼミでの活動も増えてくる中で協働の難しさを感じた結果、自己評価が一時的に低下した可能性が考えられる。

各領域における平均得点の結果及び分析の結果から、2年間の学校生活において、学習成果は単純な直線増加的により生じるものではなく、時期や環境により獲得される経験の種類によって、また、その時の学習内容や学習方法、経験する学びによっても領域における学習成果は変化することが改めて示されたと言える。一時的な評定値の減少も、自身の成長により理解できる事柄が増えることで新たな課題に気づき、成果の到達目標が変化することでより高められるとも言えるであろう。

また、学生の自己評価の変容を客観的に捉えるために、項目の見直しや測定方法等に関する検討も継続的な課題となる。

様々な学生の学びを保証する取り組みは、今後一層求められるものであり、本学においても、カリキュラムや授業内容等について、社会の動向も含めて、早急に検討・再考していかなければならないだろう。

このほか保育学科では、PROGテストを在学中に2回実施しており、学生にはテスト後1か月程で個々の分析結果が返却される。1回目は入学直後に実施し、2回目は本来卒業前に実施して大学生活におけるジェネリックスキルの伸長を社会に出る前に自ら確認し改めて意識できるものであるが、自身の強み・弱みを客観的に認識・発見できるため、就職活動においても役立つものとして、保育学科では2年次後期開始後の早い段階で実施している。表は、1年次4月と、2年次10月のPROGの結果から、知識を活用して課題を解決する力であるリテラシーと、周囲の環境と良い関係を築く力であるコンピテンシーの伸長度を示している。リテラシーについては、総合としては1年次より2年次で0.19ポイント上回った。4つの力と処理能力の各分野においても、「情報分析力」がわずかに1年次を0.02ポイント下回ったのみで、その他の分野は全て1年次より高い数値を示した。特に「構想力」及び「非言語処理能力」では1年次のスコアを大きく上回った。保育を構想すること、そして言語でコミュニケーションできない乳幼児との関わりについての学習及び実習等における実践が、これらの力の上昇に関わったと考えられる。コンピテンシーについては、総合ではわずかに1年次を0.01ポイント下回る結果となった。中でも9つの要素のうち対人基礎力の「親和力」、「協働力」が下がっているのは、保育者を目指す者としては少々残念な結果である。改善のために、この結果を教員間で共有し、これらの力の育成に関わりが大きいと考えられるようなゼミ活動や行事、授業の内容・手法を意識的に見直していく必要がある。しかし、1年次では最も数値が低かった「統率力」では2年次で0.21ポイントの上昇を示しており、「自信創出力」も同じく上昇しているのは、注目の結果といえる。

＜令和6年度卒業生のPROGによるリテラシー・コンピテンシーの結果（成長分析）＞

リテラシー成長分析		1年次	2年次	伸長度
リテラシー総合		3.02	3.21	0.19
4つの力	情報収集力	2.90	3.02	0.12
	情報分析力	2.81	2.79	▲0.02
	課題発見力	2.62	2.80	0.18
	構想力	2.79	3.06	0.27
処理能力	言語処理能力	2.68	2.85	0.17
	非言語処理能力	2.26	2.57	0.31

コンピテンシー成長分析			1 年次	2 年次	伸長度
コンピテンシー総合			2. 89	2. 88	▲0. 01
3 つの力		対人基礎力	3. 52	3. 46	▲0. 06
		対自己基礎力	3. 20	3. 27	0. 07
		対課題基礎力	2. 93	2. 88	▲0. 05
9 つの要素	対 人 基 礎 力	親和力	4. 13	3. 95	▲0. 18
		協働力	4. 06	3. 88	▲0. 18
		統率力	2. 42	2. 63	0. 21
	対 自 己 基 礎 力	感情制御力	3. 03	3. 03	0. 00
		自信創出力	3. 14	3. 35	0. 21
		行動持続力	3. 21	3. 36	0. 15
	対 課 題 基 礎 力	課題発見力	2. 58	2. 71	0. 19
		計画立案力	2. 96	2. 80	▲0. 16
		実践力	3. 39	3. 44	0. 05